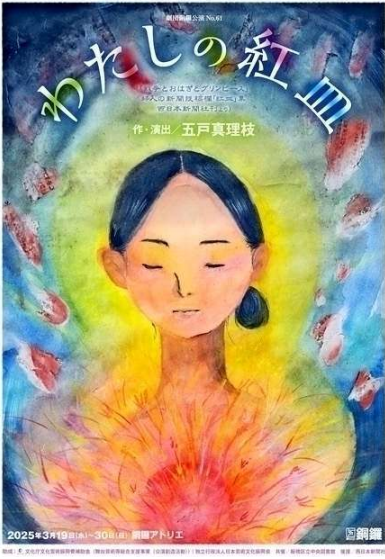


彼女たちがいたということ

劇団銅鑼 公演「わたしの紅血」



公演チラシ

平和と人間愛がテーマの劇団銅鑼が、戦後80年の今年、新聞の女性投稿欄を元にした作品「わたしの紅血」を上演します。作・演出をつとめる五戸真理枝さんに話を聞きました。

作演出 五戸 真理枝さん



女性が 見つめる戦後

高度経済成長期のきざしが見え始めた1954年。西日本新聞で始まった女性投稿欄「紅血」には、子どもとの会話や家計のやりくりなど、暮らしにまつわるリアルな声が掲載されています。その投稿のほとんどに、戦争の爪痕が残っていました。

五戸さんが話します。

「32歳の主婦の投稿から今回の登場人物が生まれました。戦後結婚し、幸せに暮らしているはずの夫・正幸は、毎夜断崖に落ちた恐怖にうなされていきます。妻のひろ子は、子どものように泣く正幸を慰める。彼女たちの言葉の生々しさ、生活者の叫びのような声を生かしたい。その声に対して私たちが時代を経て、舞台上で応える作りにしました」

戦争の責任者はだれか

決して繰り返さないと思ったはずの戦争。しかし今、まったく違う意味を持って戦後が迫っています。



稽古風景(銅鑼アトリエにて)

「10年前だったら私たちはもって、平和を信じられました。でもウクライナ戦争が起り、ガザでのパレスチナ人虐殺が起り、すごい勢いで日本の軍事費が増えて…。戦後9年と戦後80年はどう違うんだろう？」と

1954年は、自衛隊が設立された年です。ひろ子の弟・隆志は、「平和のために」自衛隊に志願すると言います。自分のやり方を否定しないでと頼む隆志に、母の美律

編集部から

新婦人しんぶんを読んで、話を聞きたい。聞きあうしんぶんタイム。政治を、(7面)。また体験したことがな



(☆風景、人物、動植物、9条グッズの写真をお寄せください。Eメールでも可)

大豆のおひなさま
さいたま市 石崎日出子
鶴の子(大豆(北海道産)で作りました。箱をかぶせて、しまっておけます。

必死に 考えること

舞台には、銅鑼の劇団員が本人役で登場し、戦後9年と現在を結びました。私たちが実際に話した会話からセリフを書き起こしています。実はまだ、台本も変わる可能性があります。今の日本は被爆や過去の戦争を忘れそうになっていて、アメリカとの関係や経済など、いろんな事情の上に私の平和な生活がある。そう考えると私たちは、戦争に対して完全なる反対者になるのは不可能なのかもしれない。

私たちが ここにいる

女性たちが紅血の投稿に託した思いはなんだったのでしょうか。「たぶん、私たちはここにいたのだと、言葉で残したかったのだと思うのです。戦争で傷ついた人が、仲間を助けられなかったと悔やむ人が、息子を亡くし、思い出のおはぎを作るたびに涙を流す人がいたということ。識者でも学者でもない市井の人々が書き、投稿したその行為を、私は偉大だと思ふ。彼らの言葉を舞台から届けます」



『戦争とおはぎとグリーンピース』西日本新聞社 1400円+税

「もしかしら、現代の私たちの思考の浅はかさが見えてしまう可能性もあります。でも、投稿された彼女たちの声を受け止めること、戦争を自分のこととして必死に考えること。それだけは伝えたい。命の重さを誰もが自覚したら、次は、戦争を遂行する人を止められるかもしれない」

旬レシペ



半分は皮をむいて白い薄皮を取り除いてほぐし、ソースの材料と混ぜ合わせる。
③新タマネギを薄切りにし水にさらして水気をきり、ベビーリーフと軽く混ぜる。
④タイをそぎ切りにして器に並べ、中央に③のをのせて②のソースを回しかける。
■1人分207kcal、塩分1.2g

鯛のカルパッチョ・いよかんソース
管理栄養士・料理家 金丸絵里加